

卒業論文

自主夜間中学の組織論

2009年度入学

文学部 人文学科

社会学・地域福祉社会学専門分野

2013年1月提出

要約

夜間中学とは、差別や貧困をはじめとした様々な事情で学齢期に学校に通うことが出来なかつた人々に、改めて学びの場を提供する活動である。公立の夜間中学が設置されている都府県もあれば、ボランティアで夜間中学を運営している（自主夜間中学校）道県もある。

本論文では、夜間中学という教育の現場において、プロと言える現職の教員や退職した教員と、素人とも言える一般市民や大学生との間には、特に後者が感じている壁があることに着目し、福岡県において教員とほぼ同じ比率で、一般市民や大学生がボランティアの担い手として活躍している、福岡県内 2 校の自主夜間中学校について論じた。この 2 校の夜間中学は週に複数日開講しており、教員と活動歴の長い一般市民とで運営している曜日と、大学生と活動歴の浅い一般市民とで運営している曜日があり、曜日によって生徒は変わらないが、ボランティアの属性が異なるという特徴がある。

はじめに、2 校に共通したボランティア側の課題として、教員が中心となって運営している曜日は、ボランティア一人ひとりの参加意欲は高いが、活動に参加して日の浅い一般市民が続けにくく人数が少ないという課題があり、反対に、大学生が中心となって運営している曜日は、活動に参加して日の浅い一般市民は続けやすく人数は多いが、一人ひとりの参加意欲が低いという課題があることを明らかにした。

次に、これらの課題を解決するために、組織の専門性と責任感の高まりによる一体感の醸成が、活動に参加して日の浅い一般市民が続けにくい原因となっていることを指摘した。その上で、活動歴が長く、今では教員と対等に意見を交わしている参加意欲の高い一般市民にインタビューし、当初意識していた精神的な壁が、どのようにして取り払われていったのか考察した。その結果、活動に入ったばかりの頃には、教員経験があるかどうかということが大きく考慮されるが、いざ教員と一緒に活動をしていく中で、自らも専門的な知識を得て、教員と対等な関係で運営に携わることに抵抗がなくなつくということが示唆された。

このことから、一般市民が教員に対して感じている精神的な壁を払拭し、参加意欲の高いボランティアへと成長した理由として、改革運動に立ち会つたり重要事項を決めるスタッフ会議に参加したりしたことで、問題意識を共有し自己有用感を得られる環境が整つていたことを確認することができた。そこで、一般市民が活動に参加しやすく、構成員の一

員として続けやすい環境と、参加意欲が高く、運営を担うような存在に成長しやすい環境とが整った、ボランティア側にとって理想的な組織形態を、「開かれた組織」と定義して提唱した。

最後に、夜間中学と外部との関係に着目して、夜間中学の社会への理想的な関わり方を論じた。

今もなお、様々な理由から学びの場を求めている人は少なからず存在するが、夜間中学の活動はまだまだ認知度が低く、生徒としてもボランティアとしても、より多くの人が参加しやすい活動であるとは言い難い。実際に夜間中学への来校を躊躇った事例を挙げ、メディアは情報が偏り誤解を与えやすいことや、充分に教育の機会を保障されなかつた人の存在を知らない人が多い社会では、「全く字の読めない自分では笑われてしまうのでは」「通っていることが近所の人に知られたら恥ずかしい」との考えから来校を躊躇する人がいることを指摘した。

十分な教育を受けてきたかどうかということは外見で判断できることではないし、また今の社会では自分から言い出しにくいことでもある。そこで、十分な教育を受ける機会を得ることなく学齢期を逸した人々も含めて、全員が夜間中学の活動に参加しやすい社会を実現するために、夜間中学の活動をより多くの人に「身近な活動」として理解してもらう必要性を言及した。そして、全てのボランティアが外部とのつながりを作り得る立場にあることを確認した上で、人と人を介した情報提供（口コミ）を通じて、地域の誇る助け合いの活動として、地域に溶け込んでいく夜間中学の姿を、理想的な組織の形として提唱し、本論文を結んだ。

目次

はじめに	1
1 夜間中学とは	1
1.1 夜間中学に通う人々	2
1.2 公立夜間中学校	4
1.3 自主夜間中学校	8
1.3.1 自主夜間中学校の広がり	8
1.3.2 自主夜間中学校の担い手	9
2 調査対象校の概要	11
2.1 X校の概要	11
2.1.1 X校の運営形態	11
2.1.2 X校の生徒の特徴	11
2.1.3 X校の展開	12
2.1.4 X校の資金繰り	12
2.2 Y校の概要	13
2.2.1 Y校の運営形態	13
2.2.2 Y校の生徒の特徴	14
2.2.3 Y校の展開	15
2.2.4 Y校の資金繰り	15
2.3 X校、Y校のまとめと論の展開	16
3 研究方法	17
4 今のX校の運営形態に至るまで	17
4.1 A先生とX校の関わり	17
4.2 生徒の勉強の質を高める「学習記録制度」	19
4.2.1 学習記録制度の概要	19
4.2.2 学習記録制度の効果～y2の事例から～	20
4.2.3 考察	21
4.3 ボランティアの人数を安定的に確保する運営体制	22
4.3.1 x1とx2で異なるボランティアの人数の課題	22
4.3.2 学生リーダー制度	24

4.3.3 グループ学習制度.....	26
4.4 小括	29
5 x1 に新しいボランティアが定着しにくい要因.....	31
5.1 阻害要因 ①ボランティアの属性.....	31
5.1.1 新参の市民ボランティアへのインタビューから	33
5.1.2 x1 の古参の市民ボランティアへのインタビューから.....	36
5.1.3 新たな運営方針の提案	39
5.2 阻害要因 ②一体感の強さ.....	40
5.2.1 y2 の古参ボランティアに見る責任感	41
5.2.2 y2 の新参ボランティアに見る強い責任感.....	43
5.2.3 一体感の強さが、悪影響を及ぼすメカニズム	44
6 これからの中学校の姿とは	46
6.1 B 先生が中学校に溶け込むとはどういうことか.....	47
6.2 B 先生の参加による中学校の変化.....	49
6.2.1 「量」の増加と「質」の低下	49
6.2.2 新たなネットワークとのつながりとその可能性	53
6.3 地域社会へのアプローチ	54
おわりに	57
参考文献	59